

## IV 各部会の研究

### 少人数指導部会の研究

#### 主 題

低学年における基礎・基本の習得と確実な定着を図るための指導法の改善

#### 1 主題設定の理由

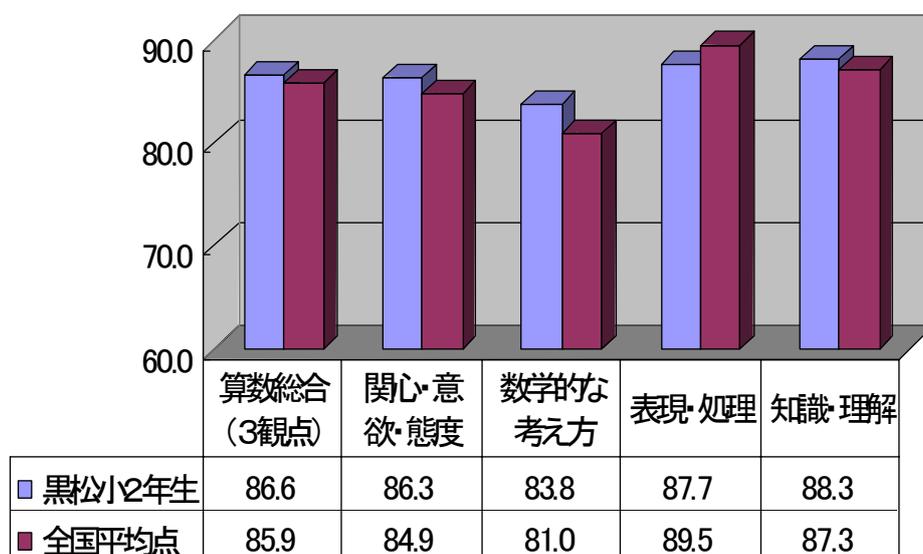
算数は系統性の強い教科であり、一度「分からない」「できない」という苦手意識をもってしまうと、その後長期間に渡って学習が停滞してしまう恐れがある。したがって、低学年の段階で苦手意識を払拭し、算数に対して肯定的な感情をもたせることが重要である。

このような考えのもとに指導に当たってきたところ、昨年度2月のCRTでは、表現・処理でやや下回るものの、他の観点ではおおむね全国平均を上回る結果となり、1年間の学習の成果を得ることができた。また、同じ時期に1・2年生を対象に実施した学習意識調査によると「少しでも勉強ができるようにがんばっているか」「宿題は忘れずにするか」「難しい問題でもあきらめずにやるか」という設問に対し、「いつもそうしている」と回答している児童の割合が大きく（P70～参照）、算数に対する意欲の高さを感じられた。一方、「進んで発表しているか」という設問に対しては、「するときとしないときがある」と回答した児童が多く、発表に対して抵抗を感じていることが分かる。また、「分からないところは進んで先生に聞きに行くか」という設問に対しては、2年生は「するときとしないときがある」という回答の割合が「いつもそうしている」を上回っていた。2学年になると、「分からない」ということに恥ずかしさを感じるようになっていいると考えられる。

そこで、算数の入門期ともいえる低学年の学習においては、ことさら基礎・基本の習得を徹底し、確実に定着を図りながら、自信をもたせ意欲を高めていく必要がある。そのためには、児童の実態把握に努め、これに則して教材研究を行っていくことが求められる。また、課題の提示の仕方を工夫して、児童の興味や関心、学習意欲が継続するように導いたり、試行錯誤を繰り返し納得のいくまで操作活動ができるように時間を十分に確保したりすることも大切である。

学級を二分割した少人数指導では、グループ内の人数が少ないので発表がしやすい。また、教師の目も届きやすく児童の学習状況を把握しやすい。これらの少人数指導のよさを生かしながら「確かな学力」を身につけさせたいと考え、本部会主題を設定した。

算数CRT平均点（2005年2月）



※CRT平均点は、現2年生が1学年2月の時点で実施した結果である。

## 2 育てたい力

関心・意欲・態度	数学的思考
<ul style="list-style-type: none"> <li>算数の楽しさを感じながら、様々な算数的活動に取り組むことができる。</li> <li>既習事項を日常生活に役立てることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>操作活動や体験を通して、考えることができる。</li> <li>図や絵を用いて、解決方法をイメージすることができる。</li> <li>具体物や絵図を使って、自分の考えを発表できる。</li> </ul>
表現・処理	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>計算や測定などの作業が丁寧にできる。</li> <li>基礎的な問題を正確に処理することができる。</li> <li>既習事項を生かして、問題を解くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>数量や図形について豊かな感覚をもつことができる。</li> <li>意味や性質について理解することができる。</li> <li>学習事項を習得し、定着させることができる。</li> </ul>

※少人数指導部会の「育てたい力」は、どの児童にも身につけさせたい最低限度の力を示しています。

## 3 主題に迫る手だて

### (1) 指導計画の工夫

#### ①少人数指導のよさを生かす指導計画の作成

- 指導者が学習内容や指導方法を共通理解して指導することができるように、授業の流れが具体的に分かる指導計画を作成する。また、それに基づいて一人一人にきめ細かな指導ができるようにする。
- 活用する具体物や半具体物等を明記し、操作活動や体験活動が十分に行えるようにする。

#### ②児童の実態に応じた指導計画

- 少人数のグループではあるが、関心や意欲、学習速度、既習事項の定着度等には個人差がある。事前に意識調査やレディネステスト・プレテストを行い、児童の実態を把握して指導計画に生かしていく。また、単元の特性や系統性を考慮しながら、児童の学習がよりスムーズにかつ効果的に行えるように工夫する。

### (2) 指導方法及び指導過程の工夫

#### ①課題提示の工夫

- 児童の実態や単元によってどんな課題提示が効果的か模索していく。例えば、視覚に訴えた課題や身近な生活素材からの課題、ストーリー性のある課題などが考えられる。

#### ②自力解決に導くための工夫

- 問題文を確実に把握するために、大切な言葉にアンダーラインを引かせる。また、自分の考えを分かりやすくするために絵、図、マーク等を活用する。こうした手だてを習慣化することにより、解決の見通しがもてるようにする。
- 児童の自力解決を促すために、操作しやすく思考の助けになる具体物や半具体物を提示する。また、学習状況に合わせて提示するタイミングなども工夫する。

#### ③児童の考えを生かした学び合いの工夫

- 一人一人の考えを大切に、多くの児童が発表する場を設定する。
- 様々な考え方に触れる機会を多くもち、多様なものの見方ができるようにする。

### (3) 評価の工夫

#### ①一人一人の考えや学習状況を見取るための工夫

- 座席表を活用しながら一人一人の考え方やつまづき等をとらえ、机間指導を通して個に応じた支援を行う。

#### ②学びの振り返り

- 「まとめ」の段階で、学習した内容について評価するプリントをさせ、習得状況をとらえることで次時の指導に生かしていく。
- 自己評価カードへの記入や感想を書かせたり発表させたりすることで、学びの振り返りをさせ、次時の目標をもたせるようにする。

#### ③「学習チェックカード」の活用

- 学習チェックカードに記録し累積することで、一人一人のつまづきや定着の様子を把握し、指導に生かしていく。